

# 園外保育のいも掘り体験が幼児の絵画表現に及ぼす影響

坂井田 節・渡邊千恵子

## Effects of the Experience with the Scoop out Sweetpotato on Sweetpotato Picture of Kindergarten Children

Takashi Sakaida and Chieko Watanabe

### Summary

In this paper we examined painting action of kindergarten children on the experience with scoop out sweetpotato.

The purpose of this study focused on elucidating how kindergarten children are able to develop on the problems in the processes of painting action through the experience with scoop out sweetpotato by outdoor activities. The developments of infants' picture are influenced by environments of social life and direct or indirect experiences.

We compared with pre-experience and post-experience of the scoop out sweetpotato on infants' picture. At 12th October, kindergarten children went to fields by bus, and scooped out sweetpotato.

From the results of these investigations the following facts were elucidated. The kindergarten children indicated large rejoicing and interest to scoop out sweetpotato.

The infants' pictures were improved realistic and objective pictures from unrealistic and subjective pictures by experience of the scoop out sweetpotato.

### Key words

Kindergarten children, outdoor activities, Scoop out sweetpotato, Infants' picture

## I は じ め に

### 1. 研究の背景

幼稚園教育要領の第2章ねらい及び内容の中で、動植物とのかかわりについて「身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする」とある（領域環境）。また内容の取扱いの留意事項として「身近な事象や動植物に対する感動を伝え合い、共感し合うことなどを通して自分からかかわろうとする意欲を育てるとともに、様々なかかわり方を通してそれらに対する親しみや畏敬の念、生命を大切にする気持ち、公共心、探究心などが養われるようにすること」とある。すなわちこれらの事項は、幼稚園教育の目標である「自然などの身近な事象への興味や関心を育て、それらに対する豊かな心情や思考力の芽生えを培うようにす

ること」が、最終的な達成目標となる。

一方動植物とのかかわりを絵画製作を通して表現しようとする場合のねらい及び内容については、「生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、楽しんだりする」、「様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう」とある（領域表現）。また内容の取扱いの留意事項として「豊かな感性は、自然などの身近な環境と十分にかかわる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに出会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々な表現することなどを通して養われるようにすること」とある。これらの事項は「多様な体験を通じて豊かな感性を育て、創造性を豊かにすること」という教育目標につながる<sup>(1)</sup>。

上記のような目標を達成するための指導計画作成上の留意事項の中に「環境は具体的なねらいを達成するために適切なものとなるように構成し、幼児が自らその環境にかかわることにより様々な活動を展開しつつ必要な体験を得られるようにすること。その際、幼児の生活する姿や発想を大切にし、常にその環境が適切なものとなるようにすること」とある。この「必要な体験」には、幼児が直接触れる直接体験と絵本や映像などによる間接体験とがある。このどちらがより重要であるかについては、坂井田らが鶏胚について大学生を対象に、ビデオによる視聴体験と鶏胚の観察による直接体験との比較の中で、70%以上が直接体験の方がリアルであり、印象に強く残り、理解しやすかったとしている。また生命の神秘、命の尊さを強く感じたとしている<sup>(2)</sup>。このような結果からも直接体験の重要性が示唆される。直接体験は幼少年期の体験であってもその記憶は長く持続し、それら体験の積み重ねは知恵として身に付くとされており<sup>(3)(4)(5)</sup>、直接体験の意義は大きい。

幼児を取り巻く自然環境、社会環境、家庭環境の変化によって直接体験の機会は少なくなっており、教育目標の達成を困難なものにしている。直接体験は五官を通して行われ、触覚、嗅覚、味覚および視覚、聴覚という五感から成り立っている。前者の三つは特に基本感覚と位置付けられ、これを一つでも伴う体験を原体験といい、特に重要視されており、幼児の発育上大切な体験である。

## 2. 研究の目的

幼児の自然に対する見方、考え方は、年齢やそれぞれの体験の度合に応じて発達してくる。一般的な過程として、3、4歳児では自分を中心にして事物を見たり、考えたりする傾向が強い。このような自己中心的な思考は、自分を取り巻く環境の中で親しく体験している事象に対しては、より早く客観的な見方、考え方への発達が見られる。坂井田らは、動物の飼育を行っていない幼稚園において、年中児を対象に2週間ウサギの飼育体験を実施した。飼育体験前と体験後にウサギの絵を描き、両者の違いを分析・検討した。その結果飼育体験前にみられたウサギのアニミズム的な絵画表現は、飼育体験を通して写実的な表現に変容した<sup>(6)</sup>。このような変化は幼児期の発達にとって必要な変化であり、動物飼育による幼児期の直接体験の重要性が示唆される。

動植物とのかかわりについては、園庭の一角で動物を飼育するとか、植物を栽培するとかして、幼児の身近に常に観察・触れ合いの材料を用意し、いつでも自由にかかわれるようにしておくことが大切であろう。一方園外に出て、日常の園生活では体験できない生活を体験させることは、前述したような幼児を取り巻く環境の変化から、今後ますます必要となるであろう。

そこで本研究においては、いも掘り（サツマイモ）遠足という園外保育による直接体験が、幼児の絵画表現にどのような影響を及ぼすかを分析・検討しようとした。まだいも掘りの直接体験

が比較的少ない年少児を対象に、いも掘り体験前と体験後の絵画表現を通して、いも掘り体験が幼児にどのような影響を及ぼすかを究明しようとした。

## II 材料および方法

対象幼児は附属幼稚園の年少児12人（男子4人、女子8人）である。まずいも掘り体験前の調査として、クラス全員にいも掘り遠足まであと5日であることを話し、「どんないもが掘りたいか、絵で描いて教えて」と発言し、白色八つ切りの画用紙にクレヨンで描いてもらった。その際、幼児自身がいもについて持っている概念を大切にするため、こちらからいもに関する発言はしなかった。絵画表現の終了後、全員に対し以前にいも掘りの体験があるかどうかや描いた絵について聞き取り調査を行った。

いも掘り遠足当日は、バスでいも畑へ行き、いもを掘って昼食を食べ、また幼稚園まで戻り、掘ったいもはそれぞれ持ち帰った。その間、保育者の言葉かけや幼児の活動の様子、幼児のつぶやきを中心に観察した。

いも掘り遠足の2日後、クラス全員に「いも掘り遠足で、どんないもが掘れたかいもの絵を描いて教えて」と発言し、体験前と同一方法で描いてもらった。いも掘り体験前と体験後の絵画表現を比較し、直接体験による影響を分析・検討した。

## III 結果および考察

### 1. いも掘り遠足までの保育者の環境構成と幼児の反応

保育者は帰りの会や時間に余裕のある時などに、サツマイモに関する絵本や紙芝居を読むことによって、いも掘り遠足への期待感とイメージ作りを盛り上げようとした。具体的には紙芝居「いもほりえんそく」<sup>(7)</sup>、絵本「おおきなおおきなおいも」<sup>(8)</sup>、「さつまいも」<sup>(9)</sup>、「さつまいものふしぎ」<sup>(10)</sup>の4点である。その内容はいものでき方やいも掘りのやり方、いも掘り遠足をテーマにしたものなどであった。またお便り帳のいも掘り遠足の予定日の欄にいものシールを貼って、「いも掘り遠足まであと何日かな」と期待感を持たせた。

上記のような環境構成による保育者の働きかけに対する幼児の反応としては、絵本の読み聞かせを集中して聞き、自分なりにイメージを確立しているようであった。絵本を気に入って何回も「もう1回読んで」とせがんだり、話の内容を覚えてしまって幼児同士で読み合っていたり、遊びの途中でふと絵本の文章を口にする例もみられた。また絵本の内容をもとにした綱引きなどのごっこ遊びや「ちびいもさん」、「でぶいもさん」といった言葉遊びに発展する例もみられた。給食にいもの料理がでるといもの種類に関係なく、興味・関心を示す幼児もみられた。家庭においても毎朝起きると「今日いも掘りの日?」と聞いたり、「たくさんいもとってくるからね」などと、いも掘り遠足に対する期待の高まりが多方面からみられたことから、保育者の環境構成や幼児に対する働きかけなどが、適切なものであったと考えられる。

### 2. いも掘り体験前の絵画表現

幼児の描いた絵を製作技法によって分類すると、①線描きの絵、②色でぬりつぶしている絵の二つに区分される。①の線描きは、3、4歳児によく見られる描き方で、なぐりがきを意味に従

属させて描くことができる技法である<sup>(11)</sup>。絵を素早く描き上げた幼児は、絵についての説明も早々にすませ、好きな遊びに取りかかっていた。一方ゆっくり描き上げた幼児は、描いた絵の説明ができず考え込んでしまう幼児もいた。これは自由に描く経験が乏しいか<sup>(12)</sup>、自己決断するといった自主性の乏しいことが考えられる<sup>(11)</sup>。あるいは、3歳後半から4歳になるといままで脇役でしかすぎなかった言葉が、造形活動の主役になり、言葉が造形活動の発展をリードするようになると考えられており<sup>(11)</sup>、素早く描けなかったり、絵の説明ができなかったのは、幼児の言葉の発達と関連があるのかもしれない。

②のぬって仕上げたものは、12人中5人であった。色をぬるという技法は、なぐりがき、線描きより進んだ段階であり、5歳頃になると多くみられる<sup>(12)</sup>。この中には以前にも掘りの体験のある幼児が1人いた。あるいは以前に食べたジャガイモのことを思い出して描いた幼児もいた。これらの幼児は、いもについての概念をもっており、その概念を駆使して絵画表現をしたものと思われる。素早く描けない幼児の中には、幼児同士でお互いに絵を見せ合って描いている例もみられた。

描いた絵の説明としては、「大きいも」と答える幼児が多かった。またいもについての概念を持っていない幼児も多く、そのことが自信のない不安げな線描きの絵につながったものと思われる。

### 3. いも掘り遠足と幼児の活動

いも畑は附属幼稚園から約15kmのところであり、バスで移動した。バスの中では、これから取れるであろういもについて、「ちびいもさんかな」「でぶいもさんかな」とか、「あめが降ると土の中のいもはどんどん大きくなるんだよ」といも掘り遠足の紙芝居の話をしている幼児もいた。

いも畑に付くとあらかじめ茎や葉を除去した畝の1株ごとに1人ずつ対応し、素手でいも掘り活動を開始した。手当たり次第に土を掘っていき、いもを見つけるといもの上の土を掻き分けながら掘っていった。土に触れることを嫌がる幼児は見当たらず、熱心に掘っていた。いもの数にこだわる幼児、いもの大きさにこだわる幼児、たった1個のいもに満足しそれ以上いも掘りをしようとしないうちなど、幼児の活動に個性がみられた。

いも掘りを終了すると、各自取ったいもをビニール袋に入れ、所定の場所まで運んだ。1人当たり3～4kgもあるため、運ぶ途中で足をとられる幼児が何人もいた。「体がひっくり返っちゃうくらい重たいよ」と言いながら運んでいた。保育者に袋を持って頼む幼児は1人もおらず、全員大切そうに運ぶ姿が印象的であった。自分で掘ったいもに対する思いの深さが、感じられた。掘ったいもは、それぞれ家庭に持ち帰った。なお遠足は10月12日に実施した。

### 4. いも掘り体験後の絵画表現

幼児の描いた絵を製作技法の面から分類すると、①線描きの絵、②線描きと一部をぬりつぶした中間的な絵、③全体をぬりつぶした絵の三つに区分される。幼児12人のうち①は3人、②が2人、③が7人であった。いも掘り体験前は、①が7人、③が5人で両者の中間である②は1人もいなかった。したがって体験前と体験後を比較すると、線描きの絵は7人から3人に減少し、逆に色でぬりつぶした絵は5人から7人に増加し、さらに両者の中間的な技法の絵が2人いた。このような変化は、いも掘りという直接体験を通して、いもについての概念が形成され、そのことが絵画表現の中に反映されたものと思われる。

一方いも掘り体験前と体験後の絵について個々の幼児ごとに、①体験前と大きく変化した絵、②体験前とあまり変化がみられない絵の二つに区分すると、①は10人、②が2人となり、直接体験によって幼児の絵画表現は大きな変化がみられた。すなわち、いも掘り体験の感動、収穫の喜び、いもや土の感触、いもの観察といった体験が、幼児の感性を刺激し、絵画表現にも影響を及ぼしたものと考えられる。

## 5. 個々の幼児の絵画表現の比較検討

個々の幼児の絵をいも掘り体験前と体験後と比較し検討した。その際当該幼児の日常の活動の様子が加味して考察した。まず体験前と体験後で大きな変化がみられた幼児について述べる。なお絵はすべて上側がいも掘り体験前、下側が体験後である。

### ① D男

D男はいも掘り遠足の前からいもについて強い興味と関心を示しており、絵本の読み聞かせのときも熱心に聞いていた。読み終わると「もう1回読んで」とせがんでいた1人であった。しかし体験前の絵について話を聞こうとすると「知らない」といって、多くを語らなかった。「描いて」といわれたから描いたのであって、自発的に描きたいと思って描いた絵ではないようであった。いもについての関心は高まっていたが、絵として表現したいと思ってはいなかったようである。少なくともD男にとって、満足のいく絵ではなかったと思われる。

D男の絵を写真-1に示した。体験前の絵は線描きで、いもの形はしているが全体に線が弱く、不安げな線で描かれている。これに対し体験後の絵は青色と紫色の2色で、濃くぬり込んだ絵になっている。D男はいも掘り当日大きないもばかりを一生懸命集めており、「ちびいもはいらねえ」と小さいいもには無関心であった。袋に入りたいもを運ぶ時、「体がひっくり返るくらい重い」と言っていた。

このような感動体験が、体験後の絵によく表れている。「大きないもを掘ったんだ」というD男の言葉（つぶやき）が、画面一杯に表現されている。いもの輪郭からはみだしてぬり込んだ状態は、弾けんばかりの思いを画面にぶつけているように思われる。描き終わると直ちに持参し、絵について積極的に話した。「大きいいもを引っ張ったら、小さいいもがついてきたんだ」と語り、青色や緑色、2色にぬった小さい形のものは、小さいいもを描いたものである。いも掘り遠足の前は、絵本や紙芝居といった間接体験によるいも掘り体験であった。したがって「いもの絵を描いて」といわれても、いもの概念が十分形成されておらず、絵を描こうという意欲に乏しく、描く自信もなかった。しかしいも掘りという直接体験によって、いもについての概念が形成され、その概念を駆使して体験後の絵を描いたものと思われる<sup>(11)</sup>。技法的にも線描きから、色をぬる技法に変化しており、筆圧も強く絵は自信に満ちている。

### ② E子

E子にはいも掘り体験はないが、体験前の絵はほぼ完成されたいものの絵である(写真-2)。E子は5月生まれで、他の幼児より発達も早く、自分の身の回りのことや人の世話もできるしっかり者である。いもについての概念もすでに形成されており、画面の中央に赤色でぬりつぶす技法で描いている。

いも掘り体験後の絵は、いもが土の上に半分でており、半分は土の中に埋まっている状態で描かれている。すなわちいも掘りという直接体験によって、いもは土の中に埋まっていることを認識し、いもが土の中から出てきたことに感動し、そのことを絵に描いたと思われる。土の中の部

分は、ぬりつぶさないで土の中に埋もれている感じをだそうとした高度な製作技法である。

### ③ A子

A子の2枚の絵(写真-3)は、どちらもしっかりしたタッチで描かれており、しかも色でぬりつぶした絵になっている。いも掘り体験前の絵は、ジャガイモを描いたと答えた。A子にはいも掘りの体験はないが、以前に「いも」について楽しい体験をしている。中秋の名月に祖母の家で家族と月見をした。その時みんなで蒸かしたジャガイモを食べた。大きないもだったので、兄とわけあって食べたと語り、印象深い体験であったようである。そこで「いもの絵を描いて」という言葉がけに対し、月見の時のジャガイモを描いたようである。絵は丸い形をしており、ジャガイモらしく描かれている。



写真-1 D男の描いた絵

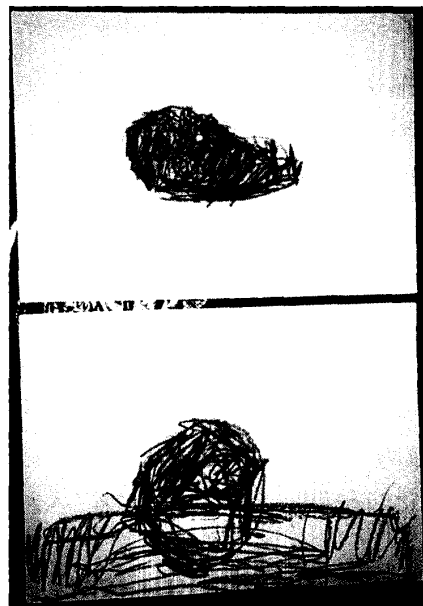


写真-2 E子の描いた絵

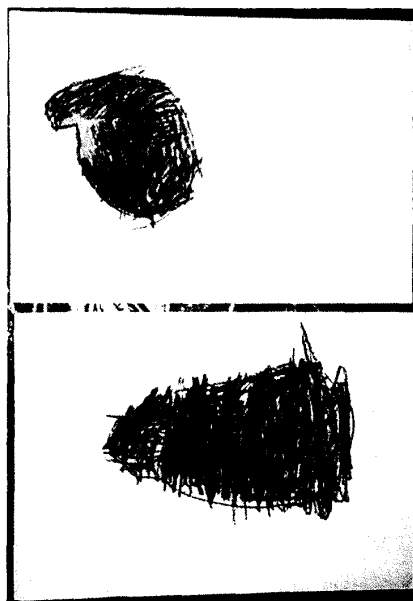


写真-3 A子の描いた絵

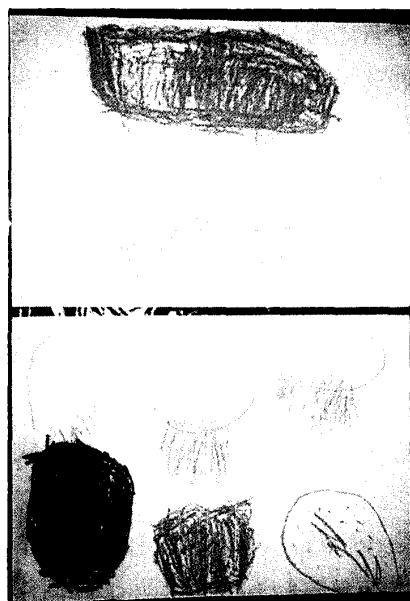


写真-4 S子の描いた絵

一方いも掘り体験後の絵は、サツマイモの形をしており、力強く描かれている。いもの大部分が黒くぬってあるのは、「土がついて真っ黒だったよ」と語り、いもに土がついている状態を描いたものである。

#### ④ S子

S子は以前にいも掘り体験をしており、体験前の絵はその時のことを思い出して描いている(写真-4)。画面上側の水色でぬってあるのがいもで、下側の黄色でぬってあるのは、いも掘りに家族で出掛けた時に乗ったバスを描いたと語った。

体験後の絵は、下側に赤色や青色、水色で描かれた三つがいもである。上側の水色で描いてある部分は、「雨が降って、いもがどんどん大きくなるよ」と語り、雲と雨を描いたものである。S子は絵本が大変好きで、保育者の読み聞かせをいつも熱心に聞いており、絵本の内容の一部をいもの絵の中に取り入れたようである。S子の2枚の絵には、簡単な物語が構成されている。単なるいもの絵ではなく、生活体験が絵の中に反映されており、S子のつぶやきを感じられ、言語力を駆使して絵を描いているように推察される<sup>(11)</sup>。

#### ⑤ S美

S美も絵本が大変好きで、読んでもらった絵本の文章をよく覚えており、遊びの中でふと口ずさんだり、保育者の役になって本の読み聞かせの真似をしたりしていた。いも掘り体験前の絵は、線描きではあるが、大小二つのいもが描かれており、絵本にでてくる「でぶいも」と「ちびいも」を描いたものと思われる(写真-5)。

体験後の絵はいもの輪郭をはみだして、褐色と黒色で力強く、なぐり描きのぬられている。褐色はいもの部分で、黒色はいもについた土を表していると思われる。絵を描く時も「どんどん大きくなるよ」といいながら一気に描き上げていった。絵本を通していもについて得た概念と実際にいも掘り体験をした時に得た概念とを総合化した形で、描かれたものと思われる。

#### ⑥ R子

R子のいも掘り体験前の絵は線描きで、ふわふわした線が多い。R子は「大きないもを描いたよ」と語っており、中央部の茶色で描かれた丸い形がいもを表しているものと思われる。回りのふわふわした線は、いもの大きさを強調しようとしたのかもしれない。何色も使っているのは、描いているうちに色遊びになってしまったのかもしれない(写真-6)。

体験後の絵はいもの輪郭を茶色で描き、何色も使っているものなかをぬり込んでいった。いも掘りの感動体験を言葉ではうまく表現できないため、体全体で感じた思いを、いもに多くの色をぬり込むことで表現したように思われる。その思いが色使いや絵の力強さの中に託されているようである。

#### ⑦ A男

A男はいも掘り体験前からいもに興味や関心を示し、特にいもの種類について記述してあるページを開いて<sup>(9)</sup>、「このいもが好き」「おいしそう」と語っていた。日常の活動の中で強いものの、かっこいいものに憧れをもっているようで、体験前のいもの絵も大きないもが画面一杯に、線描きで描かれている(写真-7)。

いも掘り当日のA男は、決して大きないもではなかったが一つのいもを掘るとそれで満足したのか、そのいもを大事そうに両手でしっかり抱え、なかなか次のいもを掘ろうとしなかった。体験後の絵は体験前に比べて小さく描かれており、体験前にもっていたいもの概念と、いも掘り体験を通して得た概念の違いが、絵の中によく表されている。体験後の絵は線描きと色のぬりつぶ

しとの中間的な絵である。また掘ったいもには長い根がついており、その根の存在に気付き観察の結果を正確に描いている。

### ⑧ S男

S男のいも掘り体験前の絵は近くの幼児と一緒に描いており、他児の真似をした何んとも自信のない、弱い線で描かれている。「いもの絵を描いて」といわれても、S男の頭の中にはいもについての概念が形成されておらず、困惑した状態でこの絵を描いたものと思われる（写真-8）。

S男は日常大変きれい好きで、フィンガーペインティングや粘土遊び、砂場遊びなど手や体が汚れる遊びには参加しないことが多い。しかしいも掘りの時は嫌がることなく、土に触って一生懸命掘っていた。自分で掘ったいもを「どうだ」といった表情でみせ、自慢げであった。したがっ

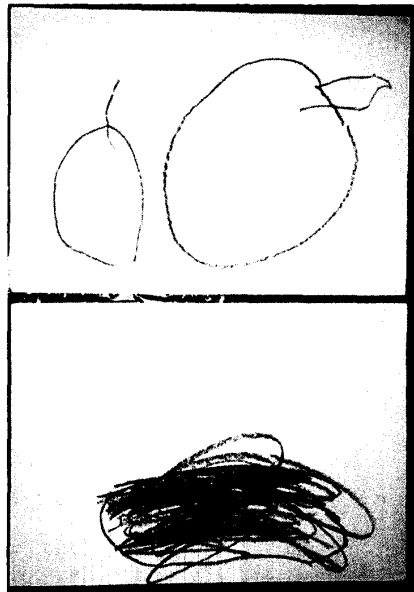


写真-5 S美の描いた絵

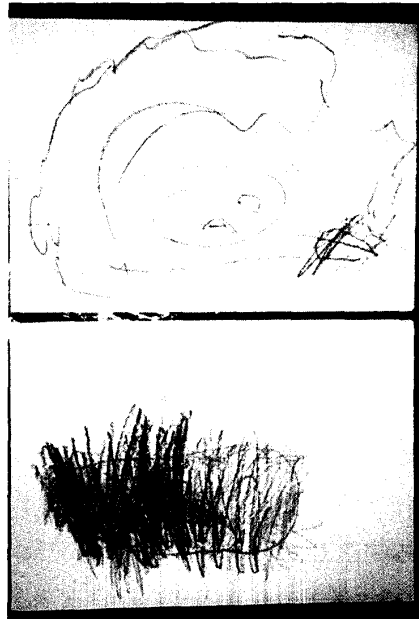


写真-6 R子の描いた絵

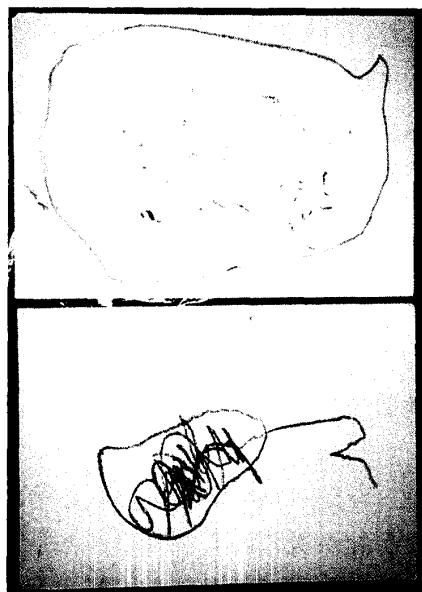


写真-7 A男の描いた絵

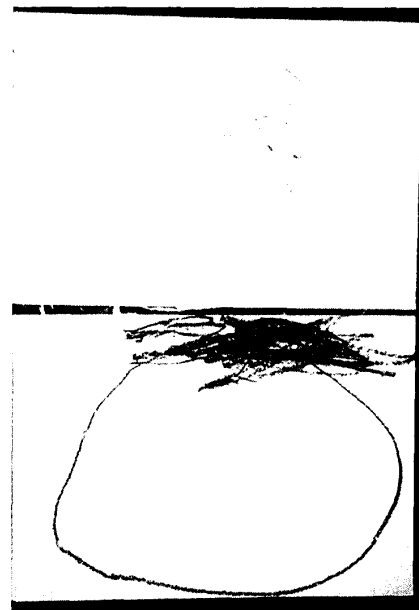


写真-8 S男の描いた絵



て体験後の絵は線も太く早いタッチで一気に描き上げていた。いもの一部が黒くぬりつぶしてあるのは、いもについていた土を表している。線描きに一部をぬりつぶした技法で、体験前に比べるといもの概念が形成され、自信に満ちて描かれている。

#### ⑨ T男

T男は体験前の絵をなかなか描き始めようとせず、やっと他児の絵をみながら描き始めたが、途中で何回も他児の絵と見比べ、真似をしていた。画面一杯にぬりつぶしてはあるが、いもについての概念が形成されていないと思われる(写真-9)。

一方いも掘り体験後の絵は、赤色で力強くぬりつぶされている。この絵を一番最後まで残って描いており、いも掘り体験の感動やその時の思いを画面に表現しようとしているようであった。



写真-9 T男の描いた絵



写真-10 M子の描いた絵



写真-11 A美の描いた絵

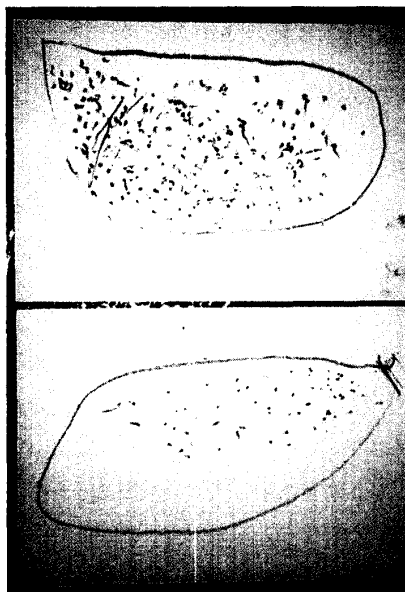


写真-12 Y子の描いた絵

いもの概念が自分なりに形成されており、他児の真似をすることはなかった。

#### ⑩ M子

M子は日常の活動の中で大変用心深く、何事にも消極的な面がみられる。体験前の絵も他児の絵を見て描いており、いもの概念が形成されていないようである(写真-10)。

体験後の絵は線描きで、ギザギザの線や渦巻きの線がところどころにみられ、線も弱々しく、困惑しながら描いているようである。体験後の絵は他児の真似をすることはなかったが、自分なりに体験を通して得た概念を、画面に表してみようという意欲に欠けているようであった。積極性を促すような保育者の援助が望まれる。

#### ⑪ A美

A美の絵はいも掘り体験前と体験後にあまり違いのみられない例である(写真-11)。体験後の絵の方が、いもの線がやや太く、本数も多い。またいもの芽が出る節目が黒い点で絵がかれており、多少の違いはみられる。しかし形状は、2枚ともいもの形をしていない。A美は3月生まれではあるが、兄がいるためか、日常の活動は活発で3月生まれを感じないほどである。いも掘りにも意欲的にかかわり、土とたわむれていた。しかし2枚の絵には、A美の日常の活動やいも掘り体験が絵の中に反映されていない。これはA美のこれまでの育ちの中で絵を描いたりした経験が少なく、絵画表現の楽しさ、喜びに目覚めていないと考えられる<sup>(12)(13)</sup>。好奇心旺盛で活発なA美の長所を活かし、多くの感動体験を絵で表現できるような援助が、今後必要であろう。

#### ⑫ Y子

Y子の2枚の絵は、いもの形や線の太さ、筆圧などほとんど違いが見られない(写真-12)。Y子は以前から祖父の畑仕事を手伝って、いも掘りの体験もしている。そのためいも掘り体験前においても、いもについての概念は形成されており、描いた絵はいもの形をしており、節目も描かれている。いも掘り当日も活発に活動しており、沢山のいもを掘った。2枚の絵に違いがみられないのは、Y子にとっていも掘りは日常の生活体験の一つとして位置づけられており、特に大きな感動が得られなかったのかもしれない。Y子は日常の活動の中でもあまり大きな感情の変化をみせることはなく、淡々としていることが多い。このような生活態度が絵画表現にも影響を及ぼしている面もあろう。前例のA美同様、自分の思いを絵で表現できるよう保育者の援助が望まれる。

## IV 要 約

(1) 幼稚園の教育目標の中に「自然などの身近な事象への興味や関心を育て、それらに対する豊かな心情や思考力の芽生えを培うようにすること」や「多様な体験を通じて豊かな感性を育て、創造性を豊かにすること」という目標がある。このような目標を日常の園生活の中で、すべて達成することは困難である。そこで幼児を園外につれ出し、園内では体験できない生活を体験させることは、直接体験の機会が減少している今日ますます必要なことである。本研究ではいも掘り遠足という園外保育による直接体験が、幼児の絵画表現にどのような影響を及ぼすかを分析・検討しようとした。

(2) 対象幼児は附属幼稚園の年少児12人(男子4人・女子8人)で、いも掘り遠足実施5日前に幼児自身が思っているいもの絵を描いてもらった。いも掘り当日はバスでいも畑に行き、1人1株のいもを素手で掘り、掘ったいもはそれぞれ持ち帰った。2日後にどんないもが掘れたかを絵で描いてもらった。いも掘り体験前と体験後の絵画表現を比較した。

(3) 保育者はいも掘り遠足への期待感やいもについてのイメージ作りを盛り上げようと、サツマイモに関する絵本や紙芝居を、帰りの会や時間に余裕のある時に読み聞かせた。このような保育者の働きかけに対し、熱心に話を聞き、何回も読むようにせがんだり、文章の一部を口ずさんだり、幼児同士で読み聞かせの真似をしたり、絵本の内容をもとにしたごっこ遊びなどがみられた。

(4) いも掘り体験前の絵を製作技法の面から分類すると、線描きが7人、色でぬりつぶしたものが5人であった。絵の内容については、幼児自身がいもについての概念を形成しているかどうか、影響しているように思われた。概念が未形成の幼児は、不安げな線描きで、筆圧も弱く、いもの形をしていないか、あるいは他児の真似をしていた。

(5) いも掘りを嫌がる幼児は見当たらず、全員熱心に掘っていた。いもの大きさにこだわる幼児、いもの数にこだわる幼児、1個のいもに満足している幼児など、いも掘り活動に個性がみられた。

(6) いも掘り体験後の絵を製作技法の面から分類すると、線描きが3人、線描きと絵の一部をぬりつぶしたものの2人、全体をぬりつぶしたものの7人であった。体験前に比べて線描きが大幅に減少し、色をぬった絵が増加した。また個々の幼児についても掘り体験前と体験後の絵を比較すると、前後の絵に違いがみられたものが10人、違いのなかったものが2人であった。前者の絵はいもの輪郭の線が太く、筆圧も強く、絵に力強さがあり、自信に満ちた絵が多かった。このような変化は、いも掘りという直接体験を通して、いもについての概念が形成され、そのことが絵画表現の中に反映されたものと思われる。

## 参 考 文 献

- (1) 文部省「幼稚園教育要領」1998。
- (2) 坂井田 節・下條清美・辻本差江「鶏胚の観察とその教材的意義」, 聖徳学園岐阜教育大学紀要, 33, 155-166, 1997。
- (3) 山田卓三「生物学からみた子育て」, 裳華房, 東京, 1993。
- (4) 社説「知恵を育てる教育を」, 毎日新聞11月8日号, 1994。
- (5) 小野木三郎「自然に学ぶ生きた知恵」, 朝日新聞(夕刊), 5月11日号, 1996。
- (6) 坂井田 節・間瀬 香「動物の飼育体験が幼児の思考の発達に及ぼす影響」, 聖徳学園岐阜教育大学紀要, 22, 203-212, 1991。
- (7) 市村久子・岡野 和「いもほりえんそく」, 童心社, 東京, 1970。
- (8) 赤羽末吉「おおきなおきなおいも」, 福音館, 東京, 1972。
- (9) 末松茂孝監修「さつまいも」, 学研, 東京, 1990。
- (10) 中山周平監修「さつまいものふしぎ」, 学研, 東京, 1997。
- (11) 鳥居照美「子どもの人格形成と美術教育」, ささら書房, 東京, 1986。
- (12) 荒木照子・武田彰子・松村容子・黒川建一「幼児期における望ましい造形的活動」, 教育美術, No.684, 30-53, 1999。
- (13) 花篤 實・辻 正宏「0～4歳児の造形」, 三晃書房, 東京, 1987。